

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

さらば、わが愛／霸王別姫

1993年・中国映画・172分
配給／アスミック・エースエンタテインメント

2002（平成14）年12月25日鑑賞〈シネ・ヌーヴォ〉
2004（平成16）年7月3日鑑賞〈シネ・ヌーヴォ〉

Data

監督：陳凱歌（チェン・カイコー）

出演：張國榮（レスリー・チャン）

／張豊毅（チャン・フォンイ
ー）／鞏俐（コン・リー）

👁️👁️ みどころ

京劇「霸王別姫」は、楚の霸王項羽とその愛妃虞妃の物語。この映画は、京劇の2人の俳優が演ずる「霸王別姫」を軸に、中国北東部を軍閥袁が支配していた1920年代後半から日中戦争、日本敗戦、国共内戦、中華人民共和国の成立、文化大革命、四人組事件、天安門事件を経て現代に至る中国現代史の激動とその中での人間模様を圧倒的迫力で描く3時間の大作。二重丸。見ごたえあり。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

〈シネ・ヌーヴォという映画館〉

地下鉄九条駅前にあるシネ・ヌーヴォはメジャーではなく、いわゆるミニシアター。興味深い映画をよく上映しているが、今までなかなか出向くチャンスがなかった。

さて、そのシネ・ヌーヴォが、日中国交正常化30周年記念、「中国映画の全貌2002-3」として、02年12月21日から03年2月7日まで、中国映画、63本を一挙上映することになった。「年末年始なら、何とか時間がとれる。何としてもたくさん観ておかないと・・・。」と考え、5回券を2枚も買ってしまった。

12月25日は言わずと知れたクリスマス。しかし今年は幸いなことに(?) 晩の予定が入っていない。そこでプログラムを見ると、この日はPM6時40分から「さらば、わが愛／霸王別姫」の上映だ。「これは何をさておいても・・・。」と思い、勇んでシネ・ヌーヴォへかけつけた。

〈京劇の魅力〉

中国の京劇は日本の歌舞伎と同じような伝統的な舞台芸術。派手な衣裳と化粧、そして

独特の演技法と発声がその特徴。そして主要かつ人気ある演目は歴史的な題材が多い。「霸王別姫」はその代表的なものだ。私は02年6月、中国から日本へ来た上海京劇院で、初めて京劇「白蛇伝」を見た。言葉が分からないインディは最初からあるが、それ以上に私の大好きなミュージカルと違って踊りや音楽が少なく、ちょっとうっとおしいなあと思いつつながら観ていたが、途中から大スペクタクルの戦闘シーンもあらわれ、結構楽しむことができた。

スーパー歌舞伎の「三国志」では、その総帥市川猿之助が、京劇特有のバク転などの立ち回りをふんだんに取り入れ、日本の古典的な歌舞伎とは全く違う、ミュージカルと同じような楽しい舞台を作り上げており、私は大好きだ。

＜京劇「霸王別姫」とは＞

これは、司馬遼太郎の小説「項羽と劉邦」を読めばよく分かる。西楚の霸王項羽は、漢の劉邦との闘いの末、九里山に敗退し、垓下において孤立した。項羽の愛妃が虞妃。夏目漱石の小説「虞美人草」でも有名だ。孤立する項羽軍に四方から聞こえてくるのは、すべて楚の歌。このような「四面楚歌」の局面に至り、今までの戦いで一度も負けたことのない項羽は、自己の敗北を覚らざるを得なかった。そして英雄項羽の気持ちを慰めるべく、虞妃は剣の舞を舞い、戦いの足手まといとなることを恐れて、自らの命を断った。こんな、有名で悲しいストーリーを京劇にしたものが「霸王別姫」だ。

＜映画「さらば、わが愛／霸王別姫」＞

この映画は1993年、陳凱歌（チェン・カイコー）監督が製作したもの。陳凱歌は張芸謀、田壯壯監督などととも1980年代半ばに中国で有名となった、いわゆる「第五世代」と呼ばれる、若き新時代の才能ある映画人達の代表格だ。

そしてまた、「項羽と劉邦—その愛と興亡」（1994年）や、「始皇帝暗殺」（1998年）などにも登場している、私の大好きな中国女優鞏俐（コン・リー）がこの作品にも出ている。京劇の霸王を演ずる段小楼（トアンシアオロウ）には張豊毅（チャン・フォンイー）が、虞妃を演ずる蝶衣（ティエイイー）には、なんと香港の大スター、レスリー・チャンが扮している。

＜中国の現代史と京劇「霸王別姫」＞

映画は、段小楼と蝶衣の2人が、少年時代、京劇の一座の中で、厳しい訓練を受ける物語から始まる。時代は1920年代後半。まだ清帝国の時代だ。当時、中国の北東部を支配していたのは軍閥の袁世凱。彼は京劇のファンであり、京劇の理解者だった。一座の師匠は徹底したスパルタ教育。段小楼や蝶衣はこの師匠からしごかれ、罰を受け、逃亡までしながらも、次第に京劇の芸を身につけていった。そして2人とも成人し、今や段小楼は

男役として、レスリー・チャン扮する蝶衣は女役として不動の名声を得ていた。段小楼と蝶衣の2人が演ずる「霸王別姫」は、袁世凱の強い応援を受けた。とりわけ女役の蝶衣は袁世凱と道ならぬ・・・の仲に・・・。しかし時代は1930年代後半。日本の中国進出は拡大し、遂に日中戦争が始まった。日本軍の中国大陸支配が強まる中、蝶衣は日本軍将校の前で彼らのご機嫌をとるために京劇を披露した。



『さらば、わが愛／霸王別姫』

ビデオ&DVD販売元：アスミックエースエンタテインメント

〈時代は移る—中国現代史〉

袁世凱の中国北東部支配から、日本軍による中国侵略へ。そして1945年の日本軍の降伏。中国は蒋介石率いる国民党の天下となったが、それもつかの間、国民党と共産党の内戦へと突入した。そして1949年10月1日、中華人民共和国の成立。中国は、共産党の天下となった。絶対的な指導者はもちろん毛沢東。その後1964年に「毛沢東語録」が刊行され、さらに「文化大革命」の嵐が吹き荒れた。そして「四人組事件」だ。さらに1989年にはあの「天安門事件」が発生した。この間、京劇の舞台役者として圧倒的な人気を誇った段小楼と蝶衣の2人は、京劇「霸王別姫」を誰のために、どのように演じたのだろうか？

また時代の流れの中、彼らはどのように翻弄されたのだろうか？この映画は京劇「霸王別姫」を通じて、この時代の移り変わり—中国の現代史—を鮮明に描いていく。

〈男2人と女1人の三角関係は〉

段小楼と蝶衣はもちろん男同士だが、女役の蝶衣には段小楼に対するあやしげな気持ちがあった。そして蝶衣は袁世凱とも・・・の仲に。他方、コン・リー演ずる菊仙は、もと女郎屋に在籍していたナンバーワン女郎。段小楼はこの菊仙を気に入っており、なかば「押しかけ女房」的に女郎屋を辞めて結婚を迫った菊仙と結婚することになった。そのため、段小楼、蝶衣、菊仙の3人の「綱引き」はいつも微妙なものとなった。

時代が前述のように激変する中、この3人それぞれの結びつきや気持ちの揺れ動き方には非常に面白いものがある。この映画は、これも丹念にフォローしていく。

〈そしてラスト〉

ラストはある意味では悲惨だ。しかし別の意味では納まるべきところに納まったようにも思える。もちろんそのストーリーは観てのお楽しみだ。

1993年、第46回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した上映時間3時間の大作。しかし決して飽きることなく、京劇「霸王別姫」を通して、中国の現代史を学び、かつ3人の生き様を十分堪能することができた。満足、満足・・・。

2002（平成14）年12月27日記